FDAでは、新型コロナウイルスの感染予防対策を徹底し、グランドスタッフは常にマスクを着用しております。今回の取材時のみ、感染対策を徹底しながら、マスクを外して撮影をしています。

文・立花 薫　撮影・東畑賢治

安全＆快適な運航を遂行する、パイロットを育てる仕事

【訓練審査部 訓練グループ チームリーダー 地上教官】

FDAの安全で快適な運航は、多くの人々の力が結集して遂行されている。
地上から空の上まで、自らの役割に誇りをもって職務を全うしている、それぞれの現場のプロたちが、何を大切に思い、どのようにFDAらしさを体現しているのかを探る連載。
今回は、パイロットの地上での訓練を担う仕事に密着した。

シミュレーターの訓練に入る前に、コックピットをそのまま再現しているタッチパネルの訓練装置での訓練からスタートする。ここまでは地上教官の担当だ。シミュレーター整備士は、操作方法をマスターしている必要があるため、シミュレーター整備士だった鈴木さんも熟知している。

「教えるのではなく、自分から学ぼうと思えるように手助けをするのが、教官の役割だと思っています」

FDAの新卒パイロットは、入社してから副操縦士として飛び立つまでに、他部署での1年の研修のあと、約8カ月の訓練期間がある。どんな状況でも飛行機の安全運航を遂行するためには、膨大な知識や技術を確実に身につけなければならないからだ。この訓練のうち、ジェット機のシステムや航空力学、フルフライトシミュレーターなど、パイロットが担当する操縦技術以外の、地上での訓練を担当しているのが、地上教官、鈴木さんだ。

鈴木さんは、入社して約5年間は、フルフライトシミュレーターの整備士として勤務していた。FDAは、小型のエンブラエル機で地方と地方を結ぶエアラインとして、あらゆる飛行状況を忠実に再現できるシミュレーターを会社設立と同時に導入し、パイロットの自社での訓練に全力を注いできた。そんなシミュレーター整備に携わるなか、鈴木さんは、パイロットの訓練に、シミュレーターの教官やパイロット以外の人たちが、関わっていることを知る。

「パイロットは会社の顔です。でも実際に空に出ていくまでには、多くの訓練があって支える人がいる。直接、訓練に関わる仕事がやってみたい！」そんな思いが募り、訓練審査部への異動を希望したのだ。

パイロット誕生に関わる緊張と充実感を感じる日々

整備の技術はあっても、教官に必要な知識や技術については、ほとんどゼロからのスタートだった鈴木さん。まずはパイロットが受ける、実際の操縦以外の訓練をともにすることに始まり、同時に教官の教え方も学ぶ必要があった。そして、知識も技術も自分のものにできてきたところで、今度は実際の授業をして教官に確認してもらい、指導を受ける。訓練審査部に異動してから、教壇に立つまでにはさらに約1年間が必要だった。

少数精鋭の大人同士が向き合う授業はなごやかに進みながらも緊張感がある。最初のころは、授業の流れを決めて原稿を準備するところから始めて、教官の真似をしてみる、という感じだったそうだ。

教材作成も教官の仕事であり、iPadには、パイロットが体に覚え込ませなければならない何百ページ、何十ファイルに及ぶテーマの教材が用意されている。

この日、教壇に立つ鈴木さんは、専門用語を駆使しながらも、軽やかに授業を進めていた。話すスピードや声のトーンにも気を配り、ひとりひとりが理解をしているかどうかをよく見ながら。教官になってから、少しずつスキルアップを重ねてきた。しかし、教官として7年目に入った鈴木さんが、現在も考えながら立ち向かっていること、それは、訓練生はみな大人であるということだ。学校で生徒に教えるのとは根本的に違うという。

「教えるというより、訓練生には自ら学ぶという気持ちになってもらわないといけないんです。相手の話を聞いて、何を求めているのかをよく考えなければなりません」

しかも、訓練生には、新卒も経験者もいて、知識や経験のレベルはさまざま。その場に臨む気持ちにも温度差があり、個性もある。それぞれの訓練生の状況も踏まえながら、大人同士の密な関係のなかで訓練を日々続けている。そして、長く厳しい訓練を経ても、全員が最終試験に合格できるとは限らない。やはり訓練生が自ら本気で取り組まない限りは、ゴールには到達できないのだという。

「正直、大変な仕事です。でも、教官になってよかったと思います」と鈴木さんは元気に語ってくれた。

さらに今年は、新しいミッションが加わっている。航空業界全体で始まりつつある、パイロットの能力をさらに高める訓練方法の構築だ。「これまでよりもっと、それぞれの機体や運航に合った訓練をして、どんな事態にも対処できるようにする」という新しい方法をFDAとしてはどうつくるか。難題ではあるが、「パイロットのために訓練の環境を整える」教官という仕事を、鈴木さんは、これからも誇りをもって続けていく覚悟だ。

導入にも携わったフルフライトシミュレーターの前で。シミュレーターは、パイロットの定期訓練でも稼働し続ける、FDAの安全運航を支える重要な機器だ。

＊フルフライトシミュレーターは、精密なデータに基づいて映し出されるスクリーンと、自在に動くモーションと呼ばれる足によって、どんな空港のどんな状況での飛行も、コックピット内のトラブルなども再現でき、訓練ができる。

鈴木孝佳　すずきたかよし
愛知県知多郡武豊町出身。中部国際空港の近くで育つ。根っからの機械好きだが「バイクや車と違って、趣味ではできない飛行機の整備士になりたい！」と中学時代から思い続け、普通科高校を卒業後、岐阜県の中日本航空専門学校・航空整備科に入学。2009年、SACC（静岡エアコミュータ㈱）にシミュレーター整備士要員として入社し、その後、FDAのシミュレーター事業部へ転籍。2014年、訓練審査部へ異動し、2015年に地上教官資格を発令される。